

～口から食べる幸せをサポートするために～

川崎協同病院で摂食・嚥下チームがスタート

専門分野の知見をもちよって

川崎協同病院では誤嚥性肺炎で入院される患者さんは多く、退院後、数ヵ月しないうちに誤嚥性肺炎で再入院される人も少なくありません。できる限り誤嚥を繰り返さないようにするため、当院ではこのほど摂食・嚥下チームを立ち上げました。

チームの発足は2019年3月で、メンバーは医師2人、歯科医師1人、看護師2人、リハセラピスト4人、栄養師1人、医療事務2人です。

主にリハセラピストが、患者さんの食事の様子を見て摂食・嚥下機能を評価しながら、医師と共に週に2回VE（嚥下内視鏡検査）とVF（嚥下造影検査）を行っています。

VEは、鼻から細い内視鏡を挿入し、患者さんの喉の状態を観察しながら、声門の動きや、嚥下反射を確認する検査です。

VFは、バリウムなどの造影剤を混ぜた食物をX線透視下で食べてもらい、舌の運動や飲み込みの速さ、食物を誤嚥していないかを確認する検査です。色々な食形態で試すことで、患者さんにあった食事を選択する事ができ、リハセラピストと病棟ナースで実践しています。



ベッド上で嚥下内視鏡検査を受ける患者さん



情報を共有するチームのメンバー

口腔ケアの点からも予防

嚥下の仕方だけではなく、口腔ケアも誤嚥を予防する重要な要因です。当院では、隣接している生協歯科クリニックの歯科医師が、往診で患者さんの口腔内の状態を確認します。リハビリ介入が必要な患者さんがいた場合には、医師とリハビリスタッフに教えるシステムになっていて、早期介入が可能になっています。

口腔ケアや、食事の際の介助を実践するのが病棟ナースです。指定した口腔ケアのやり方や食事介助の注意点を、リンクナースが中心となり他のスタッフと共有しています。

また食事の形態や、嚥下のための必要な栄養素を考えるのが、栄養師です。今後はNST（患者さんに最適な栄養療法を提供するためのチーム）とも協力し、より良い栄養療法を提供していくことを検討しています。

直接チームには関わりませんが、日々のチームの業務をサポートするのが医療事務です。主に、会議資料の作成や医療費の計算をするほか、日々の診療がスムーズに行えるように配慮してくれています。

まだ、課題が多いのが現状ですが、「口から食べる幸せをサポートするため」にチーム内で連携をとりながら日々切磋琢磨し、今後は検査入院なども検討しています。日々の食事中にむせ込みがあったり、食事中に声が哽れるなどの症状がある人について、今秋から問い合わせを受け付ける予定です。



トピックス

患者さんも職員も一緒に楽しむ歌や踊り 恒例の夕涼みの会が今年も屋上で

入院している患者さんに夏の風物詩を味わってもらおうと、川崎協同病院で毎年恒例の「夕涼み会」が、7月25日同病院の屋上で開かれました。長雨で、屋外での開催が心配されていましたが、当日は風で雨雲が吹き飛ばされ、患者さんや職員などおよそ100人が歌や踊りを楽しみました。



子どもたちのスーパーボールすくいを見守る患者さん



ほどよい風が吹く中、三味線演奏に聴き入る

会場には、お祭りの屋台のようにスイカやかき氷、輪投げ、スーパーボールすくいなどのコーナーが職員によって用意されると、患者さんも徐々に集まり、まだ日が沈む前の明るい中、田中久善院長のあいさつで、夕涼みの会は始まりました。

最初の出し物は、今年入職した研修医3人による、ロックソーランのパフォーマンスです。それに続き、浴衣姿で登場したのは、今年で4回目、地域で健康づくりの活動をしている、医療生協大島支部のみなさんによる輪踊りです。

トリは、津軽三味線で活躍している、田中志穂さんの唄と演奏です。津軽じょんがら節、ちゃっきり節、北海盆唄などの演目に、拍手とかけ声がわきあがりました。日が沈み暗くなりつつある会場では、患者さんの明るい笑顔が目立ちました。

医療者と気軽に相談できる ヘルスケア酒場がオープン



7月26日、川崎協同病院と総合川崎臨港病院の間にあるマンションの共有スペースを借りて、2つの病院のコラボ企画「あそび×まなび→カワサキげんきプロジェクト」の第7弾を開催しました。今回のテーマは、「吞んで、食べて、気軽に相談♪ヘルスケア酒場」です。

夜の時間帯に働き盛りの50歳以下の人をターゲットに定員30人で募集し22人が参加しました。川崎協同病院の理学療法士、田中祥太^{たなかしょうた}さんによる「隙間時間でできるエクササイズ」で始まり、それぞれの病院の管理栄養士が考えたヘルシーおつまみ4品をレシピ付きで紹介しました。

それぞれの医療機関の職員が参加者のテーブルにつき、通常の飲み会とは違って、健康のことを少し気にしながら参加者と交流しました。会の最後は、川崎協同病院総合診療科の齊木好美^{さいきよしみ}医師が「忙しい人のための脱メタボ講座」として講演しました。齊木医師がお酒片手に話し、楽しく学び締めく



講義する齊木医師の傍らにはお酒が



レシピ紹介を聞きながらテーブルで交流

くりました。

今回、ヘルシーおつまみだけでは物足りないということで、大島中島地域包括支援センターのスタッフが自前のピザ窯を持ち込み、本格的なピザを焼き、みんなで味わいました。KIRINからお酒が、また株式会社ヨネヤマからは、ステキな食器類が提供され、参加費用も500円と抑えられ大変好評でした。

参加者からは今後も続けて欲しいという声が多くありました。担当スタッフもやる気十分で、今後プロジェクトは定期的に開かれる予定です。

私が担当します！

読影依頼してきた医師との連携で、 正確な診断へ

今年の4月から放射線科部長として川崎協同病院放射線科で勤務しています。2005年に大学を卒業し、昭和大学病院での初期研修後、同病院の放射線科に所属しました。放射線科専門医となってから救急科に転科し、聖隷横浜病院救急科に勤務、救急科専門医の資格を取得しました。その後は牧田総合病院放射線科に勤務、放射線科や救急科の非常勤勤務を経て現在に至っています。

私は診断力に優れた医師を目指し放射線科と救急科を専門にしました。しかし、実は学生時代や研修医時代には、この二つの科に苦手意識を持っていて、救急科では上級医から怒られることもありました。そのため課題を克服してやるという気持ちも大きかったです。

放射線科と救急科での私の経験からすると、画像診断のみでは正確な診断が困難な場合が少なからずありました。臨床所見や経過を踏まえた臨床情報が、正確な画像診断に

放射線科部長
高谷 周



2005年昭和大学医学部卒業。
2007年昭和大学病院放射線科入局。医学博士、日本医学放射線学会放射線診断専門医、日本救急医学会救急科専門医、日本内科学会認定内科医、日本医師会認定産業医

は必要不可欠です。そのため読影を依頼してきた医師との連絡の重要性を感じています。

疑問点や想定外の重要な情報に関しては、患者さんの不利益にならないように私から積極的に連絡させていただいています。

画像診断と臨床診断が一致しない場合は、遠慮なく連絡をいただければと考えています。至らない点も多々あると思いますが、何とかみなさんの力になるよう努めます。

STAFF「もうひとつの顔」

地域住民のハッピーのために

川崎協同病院 事務次長 植村 仁志

川崎協同病院にいる4人の事務次長の1人として、主に入院診療の事務局として、予算達成できているかなど経営の管理や入院している方の病気や住所、紹介元や退院先から、地域での役割が果たしているか、地域との連携ができていないか戦略的分析をします。川崎協同病院が、地域住民のハッピーのために地域で診て地域で治し住み慣れた地域で生活していけるようにサポートしていける組織であり続けることが大切であると感じる毎日です。



仕事中はほとんどデスクワーク



サッカー談義で盛り上がる（右）

仕事を離れば、私は三児の父で子供たちはみなサッカー小僧です。私も昔はサッカーに明け暮れていましたので、経験から多少はアドバイスができますが、サッカー界も大きく進化していますので、難しいところはあります。

いつかはわが子も世界の舞台で活躍してほしいと念じてやまない親バカです。そんな親バカが集まる親父会でサッカー談議に花を咲かしているときの楽しさは格別です。つつい酒を飲みながらの交流の回数は増え、酒量も増えてしまいます。健康的なライフスタイルを目指さなくていいのか、自問自答することはしばしばですが、当面は「飲んべえ」スタイルから脱却できそうにありません。

協同ふじさきクリニック・在宅支援室

●訪問診療と生活環境を整える

協同ふじさきクリニックは、川崎協同病院から 200 m ほど離れたところにあります。整形外科の外来が今年 4 月から川崎協同病院へ移ったことで、現在は内科の外来と訪問診療を行っています。

訪問診療を担当しているのは「在宅支援室」です。その名の通り、訪問診療を行うだけでなく、患者さんの生活環境そのものを整えることも役割の一つとしています。

現在、訪問診療を受けている患者さんは約 180 人で、近隣のグループホームや高齢者住宅で暮らす人もいます。7 人の医師が交代で訪問診療を行い、それを 5 人の看護師がサポートします。

訪問診療は基本的に月 2 回で、2 週間ごとに診療のうえ病状を把握し、何かあればすぐに対応できるようにしています。また、看護師が 24 時間 365 日携帯電話を持ち、患者さんの家族からの相談や訪問看護ステーションなどからの連絡を受けるようにしています。

●訪問診療を始める前に準備

5 人の看護師は、訪問診療を始める前に必ず自宅を訪ねます。訪問看護ステーションやケアマネジャーなど関係するスタッフが集まり、生活の状況を見て、食事や買い物、入浴、トイレ、掃除、洗濯など日常生活が送れるように必要なサービスの検討をします。また、患者さんの服薬状況や痰の吸引といった処置の方法、急変時の対応などの情報共有もおこないます。

入院を機会に訪問診療が始まる患者さんも多くいます。入院先の病院から依頼があった場合、遠くでも時間の許す限り出向いていき、退院前のカンファレンスに参加します。患者さんや家族、関係者で情報を共有し、退院後に安心した生活が送れるように取り組んでいます。



訪問前の打合せは綿密に



医師・看護師で出発！研修医が同行することも

最近、病院の入院期間が短くなったことで、在宅支援室の患者さんのなかで医療の必要を訴える人が増えています。癌末期の患者さんも増え、短期間の訪問診療を受けながら亡くなる人もいます。医療の必要性が高いということは、急変したときに対応することも多くなります。この点、連携医療機関になっている川崎協同病院が近くにあることで、患者さんは安心できます。

●訪問診療を受けることが可能な方は

訪問診療は、「通院が困難な方」を対象としています。「歩くことができなくなった」という理由だけでなく、「待ち時間が辛くなった」「家族が通院に付添えない」「施設でなく自宅で亡くなりたい」「病院嫌いな人」など困難の理由は様々でかまいません。協同ふじさきクリニックの在宅支援室では、患者さんやその家族からの直接の相談も受けています。



川崎医療生活協同組合

協同ふじさきクリニック 在宅支援室

〒210-0804 神奈川県川崎市川崎区藤崎 4-21-2

TEL 044-270-5132 (在宅支援室 直通)

